

ヨーロッパ文化文明像 II

古 川 氏 幸*

A Portrait of European Culture and Civilization II

Ujiyuki FURUKAWA

〔B〕 ギリシャ半島 (バルカン半島)

1 ギリシャの風貌

知を愛するギリシャ人の風格は、人類史上最古のオリエント文明やエーゲ海文明の影響のもとに、高い精神的伝統をたくましく築き上げた。これが後のヨーロッパ文明の源流となるヘレニズム文明の基盤となってゆく。古代ギリシャには、人間固有の偉大なる創造力が潜んでいた。ヨーロッパ文明には、その礎となるものは他に一つ、後のローマに発達するキリスト教文化、すなわちヘブライの精神史が、併せて広くヨーロッパ全地域を一色に浸透していった。

その様相は I 篇の〔A〕イタリア半島を縦断するローマ・フィレンツェ・ヴェネツィア・ミラノの順にその一端を記してきた。ヨーロッパとは、謂はばギリシャ・ローマ的ヘレニズムの文化文明の流れと、キリスト教的ヘブライズムの精神史とがそこに織りなす巨大な文明の流れとしてたくましく二本の根幹となって全ヨーロッパ世界を風靡してゆく姿である。アジアを貫く仏教的文化文明の偉大な足跡と、イスラム世界を完全に支配する回教思想とその生活文化と並んで、ここヨーロッパには、ゆるぎなくしっか

りと組み合わせられた二本の文化文明の潮流が、余りにも歴然と西欧の一切の精神史と、社会・政治・経済・文化全面の主流を形成してゆくのである。

ヨーロッパというもっとも優れた高度の文化圏の中心に、これ程鮮明に意識される文化・文明の特質につよい感動を覚えつつ、II 篇にはギリシャ半島と、更におよそ古い文化の源流をなすエーゲ海文明、更にアレクサンダーの東征の意味とヘレニズムに触れることとする。

ギリシャ人は知を愛し、真理を探求し、自由を求め、美を好んだ。ギリシャの哲人ソクラテス・プラトン・アリストテレスの哲学思想は、今日もなお西洋思想の源流として永遠不滅の存在である。

地形的にみたギリシャ半島は、地中海、イオニア海、エーゲ海の三つの海に複雑に入りこんだ半島と多くの島々からなり、国土の 5 分の 4 は山岳地帯でおおわれ、平野は分断されて絶壁やなだらかな山麓、或いは樹木の生い茂った山脈もあれば、時には赤茶けた山肌だけの土塊、更には岩山のそそり立った断崖で、ギリシャ半島は地理的変化の実に複雑な半島である。この幾つにも分断されたポリスの生活が、不思議にも神秘的に融合して全民族と国家とを一つに纏め上げてゆく。ギリシャは一方に地形上の千差万別の風貌と、地方に共通した伝統、言語、技

* 社会系列-政治学 (Department of Liberal Arts and Science-Politics)

術、文芸が深く融合し見事に育まれゆく民族国家特有の風格を備えてゆくのである。

2 アテネ寸描

ギリシヤ半島に住む現代ギリシヤの人口の4分の1近くの250万の人口はアテネ市に住む。従ってギリシヤの探求はペロポネソス半島は割愛してアテネにとどめた。本来なら更に古代のヨーロッパ文明の真の源流をなす南方のクレタ島をも目標とすべきであったが、アテネ以外は海路エーゲ海に航路を選んで行く先を数個の島に絞った。先ずエーゲ海に至る途中のエギナ島、ポロス島、イドラ島等近くの島々を訪れた。この海の海流は四季を通じて相当荒れる。エーゲ海の探訪も島のごく一部で不完全である。スパルタの本土を知らず、アテネとエーゲ海のサロン湾のみの限られた印象でほんの一端のギリシヤの寸描である。

ギリシヤへ来訪するまでは、古代のスパルタとアテネというおよそ性格の相異った対照的なギリシヤを考え、相対的な二大都市国家の象徴が、顕著であろうと想像して来たが、今日ではアテネそのものも伝えられる古代のポリス内部で見られたポリス間の種々の相違した歴史の様相は全く跡を留めず、一つのギリシヤという印象のみが与えられた。ただ異民族である対岸の強大な外敵ペルシヤとの戦いの跡が、余りにも著しく語り告げられる。更に外敵トルコの侵入を物語る故事と遺跡が圧倒的に多数を占める。ペルシヤ戦争は東洋と西洋とが運命をかけて攻防した古代を代表する一大激戦であり、専ら守る側に立ったギリシヤの最後の戦いは海にサラミスの海戦、陸にプラテーエの陸戦の勝利で最後を飾る。

アテネで感ずる外敵としては、トルコの侵略の方が苛烈である。ドラクロアの描いたキオス島の虐殺(ルーブル美術館)こそ陰惨なトルコの略奪を物語るもの。後述するパルテノン宮殿やプロプyleイア門の損害も何れもトルコ占領下の時代の火薬庫の爆発と、ヴェネツィア海軍の砲撃による損害である。ギリシヤは17世紀にはフラ

ンスの支配下に、更にイギリスの勢力下に統治され、相次ぐ外来の征服者に蹂躪される。ギリシヤの独立は1832年、国境改訂は1881年、更に第一バルカン戦(対トルコ戦)が1912年、第二バルカン戦は1913年、この二つの戦いを介して漸くエーゲ海諸島はギリシヤ領土に復帰することとなるが、第二次世界大戦中はナチスドイツの支配下にあり、戦後ギリシヤへ戻った土地は何処にもない。相次ぐ外来勢力下に幾度遷を重ねる間に、住民達的生活体験からは次第にギリシヤ人のギリシヤ人らしい面影が薄らいでゆく。

現存する遺跡の総ては転々として時の統治権者の所有物と化して、極めて数奇の運命を辿る。貴重な品々の多くは海外へ流出し、中には大英博物館やルーブル美術館、ミュンヘン博物館等の中に修復保存されて真価を失わずに残されているが、エジプトと同じくギリシヤ国内の現地には残存する同種の遺跡は少ないであろう。アテネ市内では、アクロポリスの周辺一帯、麓のアゴラ附近から東へまわり、バイロン像を右に見て国会議事堂前を北へ国立歴史博物館、アカデミー、アテネ大学を経て考古学博物館、更に国立美術館へ向うか、或いは旧王宮横を東へマラトンへ通ずる通りへ向ってペナキ博物館、ビザンチン博物館あたりを訪ねればまだまだ多数の貴重な遺跡は限り無く現存するであろう。また不思議にもあらゆる歴史的遺産にまつわるギリシヤ神話が、今なお意外に鮮明に語り告げられて往年の面影を偲ばせるに充分である。しかし残念ながら人々の生活全般から推して、この国民からは過去の栄光は既に去って久しい想いがした。半島のもつ悲劇、とくに複雑なバルカン半島の歴史がなさしめた罪業であろうか。

3 アクロポリスの盛衰

アテネ市の中央、海拔156mの岩盤の積み重なった高台でポリスの中で一番高い丘である。先史時代にアテネの人々が最初に住みついた所で、ミケナイ時代にはアテネの王宮のあった要塞として堅牢な切り立った城壁は巨石を積み上げた岩山である。鉄器時代になると、アテネでは王

制に代って共和制にはいるが、アクロポリスは依然として神聖な聖域、神々の宿る神域であり、アテネの砦であった。B.C. 5世紀のはじめにペルシアのギリシヤ侵略がはじまり、B.C.480年にはアクロポリスはペルシア軍に一時蹂躪され、神殿は焼失して聖地は無残に胃潰された。アテネはサラミスの海戦でペルシアの大艦隊を撃破して戦局は一転、スパルタもプラターエの陸戦でペルシアの陸軍を破りギリシヤの危機は免れた。西洋と東洋の命運をかけた最初の世界戦ペルシア戦争の様相は、アテネに残る絵画、彫刻となって殆どの遺跡はこの戦争の勝利を祝するものばかりである。ペルシア戦争後、エーゲ海諸島と沿岸の多くのポリスは、ペルシアの報復に備えてデロス同盟を結び、海上武装を強化、(B.C.477年)アテネはその中心に立ってアテネの海軍力が同盟の支配権を掌握した。ペリクレス時代と呼ぶ一大発展期にアテネの軍事、経済、政治力は絶頂に達し、デロス同盟の積立金である軍資金の金庫もアテネに移され、パルテノン及びギリシヤの神殿の財源と化してアテネの極盛期を迎えた。この期に、アテネの学問、芸術、経済は隆々と栄えて永劫にギリシヤを代表するのである。かくして完成した汎ギリシヤ的組織と行事、民主的自由をモットーとする政治、経済、社会の一大統合もやがてアテネの支配下にあったデロス同盟と、スパルタの支配下にあったペロポネソス同盟とのギリシヤ内部の二大勢力圏の対決に分れ、もともと性格を異にするものとして二国の対立分裂を余儀なくする。誇りとした民主政治は次第に墮落し、市民のつくる勇敢な義勇軍も傭兵に変わり、市民のもつポリスへの強烈な愛着と情熱は姿を消して、国民としてギリシヤ人の懐いた優れた精神は没落して国家の運命は終焉へと傾くのである。幸い、政治・経済的内部の破綻にも拘らず、元来ヘレネスと同族であり、ギリシヤの神と文明を信奉する北方の隣国マケドニアが領土を拡大、アテネ、テーベ等の都市同盟をも制圧して新しく全ギリシヤを含むコリントスの都市同盟を完成させて、半島を含む周辺一帯を統一する時代がくる。国

家としてのアテネは外部からの勢力に併呑されたが、ギリシヤの世界は二代目のアレクサンダーによって惣ち東方へ拡大された。ギリシヤの精神と文明とは断絶することなく、力強く、広くオリエント世界へ浸透してゆく。即ちヘレニズム時代の到来である。ギリシヤからローマへと秀れた文化文明の系列は融合、普及、拡大してゆくのである。

4 プロプュライア・パルテノン・ニケ・エレクトイオンの神殿

アクロポリスの丘へは、オリーブの茂みの間をぬって西側斜面より上る。東側岩壁の隅からアテネ全市の眺望が開け東方下方には白々と光ったアリオパゴスの岩山が望まれる。ここは聖パウロによるキリスト教伝導の場である。五つの扉からなる広大な大理石造の門プロプュライアへ向って幾段もの石段を上って門を通りぬける。城門はスパルタとの内戦ペロポネソス戦争(B.C.431~404)が勃発したため大理石の地肌のまま外部装飾を施す余裕もなくオリジナルの姿で未完成のままで残された。建築家ムネシクレスの作である。やがてギリシヤがトルコの侵略を受け、トルコの占領下に火薬庫へ落雷して大爆発を起し(A.D.1645年)屋根も壁も飛散して無い。後にヴェネツィア海軍の砲撃にも曝らされて戦禍の跡も著しい。残っている円柱の外側の柱は重厚なドーリア式、内側は優雅なイオニア様式の列柱からなっている。

門をくぐって頂上へ登れば、最初に目につくのは西北角にある勝利の女神ニケの神殿がペルシア戦争勝利の記念として建てられているのが見える。アテネは乙女の国である。ニケの「勝利の女神」は本来翼をつけた乙女の姿で象徴された。エーゲ海から発掘された翼を広げ軍船の舳先に立って戦に臨む「サモトラケのニケ」の像はその代表的姿である。ルーブル博物館二階の中央に「ミロのビーナス」と共に飾られている。二つとも世にも名高いギリシヤの彫刻である。アクロポリスのニケの女神像は翼のないニケと呼ばれる。左手に兜、右手にざくろを持つ

乙女の姿である。この神域では**ニケ**もアテナイの女神と融合した姿で祀られ、アテネに近づく敵を追い払って国を守護した。アクロポリスの丘の上には女神アテナイを中心に神々や神話の中の英雄達が祀られていたが今はこれも無い。

ニケ神殿の左手真下に古代の劇場ヘロドス・アッティカス全景が望まれる。

パルテノンの神殿は建築家イクティノスの傑作、建設完成はB.C.432年ペリクレス時代の最盛期である。守護神アテナイ像は彫刻家フィディアスの作になる。神殿の横30.87m、縦69.51m、46本の太い簡素なドーリア式の柱で支えられている。正面は東側を向き8本の柱が並ぶ。四周を囲む太い柱の数は本来58本、各柱の下3分の1の部分は張力をもったふくらみをみせ、これをエンタッシス様式という。エンタッシスは上部に行くに従って細くミオーレス（減少）と呼ぶ建築様式で、このふくらみは日本の法隆寺の柱の上にも影響を及ぼしている。各柱の間隔も一樣ではなく夫々相違し、変化の多い独自の姿を、造形的に格別の配置がうかがわれ、造形美術の粋を凝らしたものである。東西を貫く神殿の土台の床石は円弧を画いてもり上り、外柱そのものも皆稍々内側に傾斜をつけて建てられ、それらの延長線はピラミッドの形をなし、標高2000mにも及ぶ空間計画であった。柱が揃って神殿の原型をよく残しているのは北側面、西南の角の一部には最もよくレリーフが残されている。ドーリア式列柱は長さ10.5m各縦に24本の巾ひろく浅い溝が彫られている。この柱を当時、日時計に用いたというのは、南向きの溝の正面の凹面が夫々一時間を刻み、当る太陽光線の反射角度で時間の計算ができたものと思われる。

女神アテナイはフィディアスの名作、高さ12m、顔と手足は象牙からなり、身体と衣服は木製で上に金箔を被らせたもの、1150kgの金を使用したという。中世に至ってコンスタンチノープルに移されたが火災で惜しくも焼失して現存しない。女神像は今日では往年を偲び同型小型に複製されたものが博物館に残されている。頭

部にはスフィンクスと翼をもった馬を戴き、兜をかぶり、左側に楯をもち、その間に蛇がどくろを巻く。右手掌の上には勝利の女神像（実物は2mの高さ）がのせられている。当時パルテノンに安置されたアテナイ女神像の黄金の輝きは全アテネのポリスから壮厳に仰ぎ望まれたであろう。

エレクトイオン神殿はイオニヤ式の台座と柱頭からなる色々の神を祀る神殿で、東端の一角にはアテネの町をつくったケクロプス国王の墓の屋根を頭上に支える6名の**カリアイ**の乙女が東を望んで立っている。向って左端から2人目は後に複製された模造品で実物は**大英博物館**に保存されている。古代の遺跡は現代の大気汚染に堪えかねて急に損壊が目立ってきた。時代の波はこの人家を離れた山上の神域にも迫ってきた。アテネ大学の門前に立つ学聖ソクラテスの像を仰ぎ見てギリシアへ来たという意識を強く感じたが、アクロポリスを下って王宮へ向う道の途中に情熱の詩人バイロンの像が立っている。祖国イギリスを去ってヨーロッパを放浪し、イタリアの愛国主義運動に加担したり、ギリシヤ独立戦争には義勇兵の一隊をひき連れて参戦し病死したイギリスの天才詩人の像がいつまでも臉に浮ぶ。ギリシヤ文化を熱愛したヘレニストであるバイロンが、アクロポリスの遺跡の前で、「私はいまいたずらに愛と生命を求めてここにたたずむ—(中略)—ふたたび訪れることを夢みながら」とうたったバイロンの、最後に残した詩は36才を思い出として「この日われ36才を全うす」と人生を微笑と涙の間を揺れうごく振り子ようたった孤独の浪漫詩人の生涯はここに閉じた。「アテネにこそわが胸も魂もつながる。ああ、いつの日か君を愛することをやめられよう。わが命なる君よ、われ君を愛す」とうたったバイロンの像がアクロポリスを望んで立っている。

5 国立考古学博物館

ギリシヤを訪れた人に是非ゆっくり鑑賞してもらいたい博物館はここである。アテネ市内に数ヶ所にある博物館の中で、大規模にギリシヤ

に関する出土品のみを集めたところで見学する価値が一番高い。ロンドンの大英博物館やパリのルーブル美術館程広大ではないが、新石器時代以後の重要な出土品が網羅されている。B.C. 2000年ごろ、ギリシヤ人の第一波が中期クレタ文明期を築いてゆく。すなわちこれよりミケナイの文明として又してもギリシヤ人の第二波の来住がはじまるその頃のものから、ビザンチン時代までの展示品が充満している。交通の便もよい中央にありながら、来観者が割に少なく、届出の許可さえ得れば写真撮影も容易で、古典的知識を深めるには絶好の場所である。筆者は展示品の英文の説明文を殆ど書き写す程の余裕があって後日大いに役立った。主要な展示物は一見してその偉大な歴史を回想させる彫像、フレスコ画の描かれた壺、幾何学模様の壺、フリーズ、貴金属類、黄金のマスク等である。博物館にはビザンチン美術に通ずる品も多い。ローマの末期、ローマ帝国の中心はコンスタンチノープルへと移って東洋的キリスト教世界であるビザンチウム時代が栄えるが、ここにもギリシヤの文明は依然たくましく浸透し宗教上もギリシヤ正教が、美術にはビザンチウムが隆々と栄える。ギリシヤの歴史の流れはクレタ・ミケナイ・アテネ・ローマ・ビザンチン・フランクへと古代、中世を一貫して滔滔と流れる。館内美術出土品からは、遠い人類文化発祥の夢ばかりではなかった。ヨーロッパそのものの雄大な文化・文明の流れの一端をもかいまみる思いがした。ただ不思議にも、憧れた学聖ソクラテスやプラトン、アリストテレスの姿を身近かに偲ぶよすがに乏しかったのは何故であろうか、視覚に触れない無形の思想の力は、それを意識する人の心の中にのみ生きつづけるのであろうか。

〔C〕 エーゲ海

アテネから海岸沿いに70km程南下すると、エーゲ海に臨んだ半島の南端、キラテ諸島をはじめ数々の群島を一望に俯瞰でききるスーニオン(Sounion)岬に到達する。紺碧の海と空の間

にくっきりときわ立って、岬の突端に聳立するポセイドン神殿の真白に輝く15本の白大理石の列柱はまことに素晴らしい。バイロンはこの光景を多くの詩に残し自己の姓名を柱に刻んだ。この岬の断崖に向って吹きつける海風もまた荒々しく、その昔船乗り達の航海を守護した海神ポセイドンの神殿に相応しい絶景である。この神殿も未完成のうちにペルシヤ戦争の際にペルシヤ軍に破壊されるが、後B.C.444年に再建されたものがこれである。当時は34本のドーリア式の円柱廊であったというが、今は周辺には何も無く全く孤立して岩壁に屹立する。海上はるか点々と浮ぶ世界最古の文明の発祥地を眼下に俯瞰、海も空も一つに連なる縹渺たる空間、この絶壁からは舟出は不可能でアテネの近くピレウス港からクルーズ船でエギナ島へ向った。エギナ島は古代からエーゲ海の一部を占める最も重要な商業拠点で、地中海周辺の国々の商船団の行き交う港として栄えた小島である。ここの住民はB.C.3000年頃から北西部のコロナ丘陵地帯へ住みついたのが始めであるといわれる。住民はもとはキクラデス文化圏(B.C.2500~2000)やミノア文化圏(B.C.1800~1600)から移住したものと推定される。BC 1250年頃より一時島に住民の絶えて全く無人島と化した時代があった。恐らく外敵或いは海賊の侵入殺害によるものであろうと推定される。島はペロポネサス半島の下に位するので、住民達はアテネよりもスパルタと親しい関係にあった。ペルシヤの侵入に際し、ペルシヤ戦争の勝負を決したサラミスの大海戦では、アテネ海軍と連合して善戦しギリシヤの勝利に尽力したが、後にアテネと戦って敗れ(B.C.458年)全艦隊はアテネに奪われ、島民は捕虜となって奴隷にされ苦難を重ねる。プラトン一家も同じ運命を辿った、プラトンは実は奴隷の子であった。旧来同盟関係にあったスパルタは度々エギナの島民を保護したが、ギリシヤの実力の消長とともにエギナ島の悲劇は次々と続いて絶えない。後のトルコ・ヴェネツィア戦争(A.D.1537年)の際にはトルコ軍は島民を捕え中東の奴隷市場へ売却している。エギナの史

実を調べてゆけばゆく程、エギナ島の国民の開発した高い文化と諸芸術、経済財政の活躍は目覚ましく、ギリシヤ史上最初の流通貨幣が鑄造された事実とあわせて、海運・貿易業には商船団を組織してエーゲ海周辺一帯に活躍し、当時の商業の中心地としての豊かな繁栄の跡は数知れず残っている。不幸にしてエーゲ海一円の複雑な国際関係、軍事的紛争に翻弄され、時にはアテネの支配下に左右され、或いはトルコの権勢下に服して重圧にあえぎ、またヴェネツィアの占領下に苦しみ、再びトルコに奪取されるといふ不運な運命を背負った長い不幸な歴史を辿った後、1827年のギリシヤ独立運動後は、旧来もっとも関係の深かったギリシヤ領となって最初の首都はエギナ島に置かれた。最古の文化文明の中心地は、近世に再び甦ったのである。世界に散在する海中から発掘された数々の出土品からなる古代エーゲ海文明の遺跡は、いずれもこれらの島々の優れた文化の遺産である。

エギナのアフェア神殿

知恵の女神アテナイの地方的な呼び名を**アフェア**とよぶ。**エギナ**島土着の女神としてこの島を代表する最高の神である。**エギナ**島ではB.C.13世紀頃よりミケナイ時代の女性の土偶が現在の神殿の場所より発見されており、先史時代から既に女性神が礼拝されていたことが明らかにされているが、**アフェア**神殿が建立されたのはB.C.7世紀末から6世紀初めとされる。現存する神殿はB.C.5世紀に改装されたもので、ギリシヤ本土のアテネのパルテノン神殿の構造に酷似している。丘陵の上に周囲を城壁で堅固に囲まれた**プロピュライア**（前門）をくぐると長方形の祭壇を中心に外側に32本からなるドーリア様式列柱がとりかこむ。内部の祭壇の四周には細い14本の内側の列柱が揃って、内外に並んで立つ様子は非常に壮麗で外柱は殆ど破損されずに残されている。神殿の平面の広さは長さ32m、巾16.5mでその規模はパルテノン神殿に比較して縦横共に半分の長さであるが、正面は同じく東向きで東西に奥深い側面をもつ建築様式である。

石材としては神殿の破風は大理石に刻まれ戦士達と女神群像で、トロイ戦争の遠征物語りが**アルカイック**様式と呼ばれる独特の表現技術で彫られている。パルテノンの神殿彫刻はほとんどペルシヤ戦争勝利の模様であるのに比べ、この神殿には遙かに古代のミケナイ時代の戦争物語りが刻まれている。列柱の石材は大理石ではなくて土産の石灰岩からなる。アテネのアクロポリスその他で見たギリシヤ神殿のいずれよりも遙かに古代の作で、しかもそれらの神殿の原型をとどめる**アフェア**神殿の見事な列柱、床、基壇、破風等々を驚異の眼を以て眺めた。ギリシヤの文化の奥深さに加え、その歴史の悠久さに唯々驚嘆するのみであった。今日、**エギナ**島の北東部の小高い丘にある**アフェア**神殿まで訪れる人は少いが、古代ギリシヤを知るには見落すことのできない遺跡である。**アフェア**神殿の彫刻群は古代美術の逸品として考古学上大規模の発掘調査が行われ(1811年)、神殿跡から多量の彫刻群が発見された。それらの遺跡は英国の保護でトルコ政府の管轄外に持ち運ばれ、マルタからナポリへ更にローマへ移されイタリアで修復されてミュンヘンの博物館に保管されている。

ポロス島

ペロポネソス半島南端の**ガラタ**の町の真下にある狭い**ポロス**海峡を隔てて浮ぶ絵に画いたような綺麗な小島がポロス島である。

島一面に所狭い程に密集した二階建ての真白い壁の切り立った、特徴あるレンガ色の屋根瓦の下に種々の色の変った大きな窓框と扉でかこった特徴のある民家がぎっしりと詰って、海岸線を基点に段々と島の山頂に向って積み上げられてゆく。どの家も窓と玄関に独特の趣好を凝らし、壁は白く真四角に区切られ立体的な積木細工そのもののような家並が充満している。

ポロス島は隣接のスパルタとは海峡を隔てて分離していた。遠いアテネと同盟関係にあり、アテネの政治家デモステネスは敵に囲まれてこの島の主護神ポセイドン神殿の前で最期をとげた。B.C.323年と云われる。アテネと運命を共に

した**ポロス**はギリシヤ史の本流をなすところ、ギリシヤの盛衰は即ち**ポロス**の盛衰であり、小島なるが故にその悲劇も大きい。後にローマに占領され、更にゴート族の侵入をうけ、大地震にも見舞われてカラブリア地方の町はバヨナ湾の海底深く沈んだ。今もなお海中に遺跡が映っているという。18世紀に建てられた修道院の四角形の白い壁が城塞のような姿で島の山頂に建っていた。島民の生業は農耕と牧畜だと聞く。農耕に適した土地が開けているのが不思議に思えた。

イドラ島

ヨットの浮ぶ港町、瀕繁な船舶の出入、海運の歴史に輝く東地中海の貿易を掌握し、優れた造船技術によって常に200隻を超える大型船団が、全地中海を往航してヨーロッパ各地の港へ物資を運搬した。この島の古い歴史は不明である。考古学的資料は勿論、古代中世の歴史すら漠然としている。大地殻変動があった島で、ベネチア・トルコ戦争(1714~1718)後に、漸く島の人口の主要メンバーであるギリシヤ本土からの入植に成功した人々による海運世界である。17世紀末から小型船建造にはじまり18世紀初期までに優秀な大型船の建造に移るとともに、船団は完全に武装され、地中海全域を支配する一大勢力と化した。当時の地中海はヨーロッパ・アジア(トルコ)をめぐる複雑な国際関係の輻輳する海域、近代国家の相対決するヨーロッパ大陸へ物資を送る生命線でもあった。相次ぐ戦争と並んで、国家統治を離れた無法な海賊の横行する危険極まりない海洋であった。**イドラ**商船隊も全船舶を集合すれば強力な海軍力となるが、まだ一国家としての艦隊ではなく一般船主の操業する個々の資本主による商業活動の発達である。航路上の各地の港では商売する貿易船として自己防衛を必要とする。島々へ向う船は各航海ごとに多額の商品を購入販売するための資本金を必要とし、また一航海毎に目的地に達しては、短期間に有能な最大能力を発揮し商戦に従事するその生き方を守るためには「頭資本制度 Initial Capital

System」という独特の資本の制度が確立された。一名「セルマヤ方式」と称して乗組員各自が出資して乗船し、給料の支給ではなく船荷の販売高に応じて報酬を与える利益の配分方式を採用した。一航海ごとに、個々別々の資本組合がその都度結成され、出資額に応じた利益配分を行って海上貿易に伴う危険を分散して、各自が負担した典型的な資本主義制度の活用である。速力の遅い大型貨物船を餌食として襲う海賊船に対し、各町ともに速力の速い、大砲と火薬で武装した勇敢な商船団の操作へと発展する。

ロシア・トルコ戦争およびナポレオン戦争に際しては、**イドラ**船隊158隻の優秀船が、戦時下の海上封鎖網も通商禁止令も突破して縦横無尽に広域な範囲に活躍し、富を貯えて絶頂期に達し、最高の富裕な島となった。

ギリシヤ民族解放のギリシヤ独立戦争が勃発するや、(1821年)**イドラ**島民は一団となってギリシヤ独立戦の戦列に加わり、商船隊は直ちにギリシヤ艦隊を結成し戦力と財力を投じてギリシヤの独立を支援したのである。

ギリシヤ独立戦争への島民の参加を決意した記念すべき部屋は、町の中心に建てられた聖母マリアの召天記念として建堂した大聖堂の中の会議室である。歴史的部屋として今は来訪する人々に公開されている。ビザンチン芸術と古典芸術を見事に調和させた建築として特に名高く、この聖堂は、見事な鐘楼と、バルカン戦争戦没者の慰霊碑のあることでも有名で、**イドラ**の町の精神的拠点となっている。**イドラ**島の心臓部は扇型に広がった港であり、街並の形も港湾を包む形で扇状に美しく広がり、そこに立つ家々の構えも皆大きい。気品の高い街路にそって窓と玄関の扉に色彩豊かな趣好をこらし、大型の植木鉢と赤い花と綺麗なつる棚で飾られて、白い石だたみを敷いたうっとりするような風雅な街路を、袋を背負った可愛いロバが行き来する。**イドラ**の交通機関はロバである。自動車の走れるような道も無ければ、規則の上からもその乗り入れが禁止されている、現在はいとも平和な不思議な町である。余り遠くはない近世期

に、地中海貿易を制覇した港町の名残りが島全体を包んで、雅かなたたずまいの漂う心なごむ港町である。近代化から未来へ未来へと進行する世界とその大都市の様相とはおよそ縁遠くかけ離れているエーゲ海の島々、筆者の訪れたのはサロン湾のごく一角の三島にしか過ぎない。しかしギリシヤ半島では知り得なかった世にかくされた驚くべき過去の歴史を、まざまざと感じとることができた。

〔D〕 アレクサンダーとヘレニズム

アレクサンダー王政はセサロニキから40哩程の距離にあるペラに都をおき統治を行ったが、アレクサンダーはその生涯を殆ど東征に費して彼の足跡はインドにまで及ぼした。ギリシヤ文化の東進はここにはじまる。生誕地ペラの都は直ちにその本拠をエジプトのアレクサンドリアへ移し、ここを拠点にギリシヤ文明は中近東一帯から地中海全域に広がった。この時既にギリシヤではその本土には政治的生命力はぬぐい去られて、その方の中心は中近東を経由して東西へ広く拡大してゆく。バルカン半島の先端を占めるスパルタの如きは、かつての活力をばその地点に封じこんだ最も典型的パターンであろう。

国家として、政治・経済的権勢は次に興るローマの範囲に移り、政治的基盤は自然にローマ大帝国の文明像へ移植されてゆく、即ちローマの思想も文化も学芸もすべてその根源は悉くギリシヤに発する。ローマ200年の平和の基盤もヘレニズム時代を代表するギリシヤに生れたストア哲学の堅固な思想と、その風格から受ける影響は極めて大きい。文化や文明の生命は永く、国家の生命の短いといわれる事実の典型もまたギリシヤの本土に見られる。但し後世ギリシヤ独立戦争によって再びギリシヤ国家の名で復活したことも、世界の他の地域では余り見られない現象である。それだけに偉大な、史上永遠に残すべきギリシヤの名称とその文化・文明を称えるべきである。

ギリシヤから文明がローマへ移るその過程に

おいて、古代文明の中に忘れることのできない重要な人物の登場する特記すべき事件は、マケドニアのアレクサンダーの出現であり、彼の世界帝国への雄大な思想と新しい人類の歴史への一大開眼であった。その活躍した年限は僅々16年、大王は34才で生涯を終えた。好敵手ペルシヤのダリウス王とその家族をも温かく遇した世紀の英雄は、バビロン城内で高熱病で急逝した。B.C.323年6月11日の夕刻であった。大王亡き後の王家一族の運命は悲業に終るがここには触れまい。

大王の余りにも短命にして巨大な足跡が如何にしてヨーロッパ文明の基礎を確立したか、ヘレニズム文明発祥の経過については最後に触れておきたい。

アレクサンダーの非凡の名声はアテネ連合軍35,000をマケドニア総指揮官として弱冠18才を以てせん滅したカイロネイアの戦(B.C.339年)の奮戦であった。アレクサンダーは、アテネに対し寛大な条件で和平を結んで、ギリシヤ統一をめざすコリント同盟を結成してギリシヤの全ポリス世界を統合し、宿敵ペルシヤ帝国に対し宣戦を布告した。その昔ギリシヤがその命運をかけて防衛したペルシヤ戦争は、辛くもB.C.490年のマラ톤の戦いと、B.C.480年のサラミスの海戦を基軸に九死に一生を得て勝ったが、大帝国ペルシヤ軍は遠く海外への遠征軍であり、依然としてペルシヤ本国にゆるぎは無かった。当時ペルシヤのアケメネス王朝は西アジア一帯から地中海東欧に及ぶ広大な領域を支配していた。スパルタ・アテネの決戦ペロポネソスの戦いもペルシヤの軍資金と援助が双方に介入した謂はば金で操られたポリス間の内紛にすぎなかった。

アレクサンダーは即位後直ちに強大なアケメネス朝ペルシヤ討伐を敢行する。アレクサンダーはギリシヤの英雄アキレウス・ヘラクレスの子孫であり、神の子であるとの神託のもとに参戦した。軍事行動の総ては精神的であり、宗教的信仰を伴った。どの戦場も幼少にして荒馬を乗りこなした騎馬の名手として、果敢な重武装

の騎兵集団を先頭に立てて指揮し、想像を絶する迅速さで前進した。黒色の名馬**プーケファラス**は大王の愛馬としてインドの戦野で死去するまで勇敢に行動を共にした。ギリシヤの出土品に多い馬と騎馬少年の彫刻は恐らく少年アレクサンダーと名馬**プーケファラス**を刻んだものであろう。

世紀の決戦イッススの激戦はB.C.333年、ダリウスⅢ世のペルシア軍の総勢600,000、アレクサンダーの主力は精鋭を誇る騎兵集団5,000と40,000からなる重装歩兵軍団からなり双方が激突した。ペルシア軍撃破後は、逃亡するダリウスⅢ世を追跡してカスピ海の東南まで進軍する。ダリウスⅢ世は部下に弑逆されて果敢ない最後を遂げるが、アレクサンダーは好適手の死を悼み、その母后、王妃、王女を大切に扱った。ダリウスⅢ世も大王の人柄に感謝と期待を寄せて息をひきとったと云われ、アレクサンダーはダリウスⅢ世の死体に己の外套を脱いで覆いあつく葬ったと伝える。

アレクサンダーの精神教育はアリストテレスによって幼少より薫陶された。彼は恩師の教え「中庸の徳」をよく守り、沈着、自制の精神を涵養した。王の世界帝国**ヘレネ**の思想は、師アリストテレスのギリシヤ中心の思想を遙かに越える、小亜細亜全般、更に中東、インド、アフリカ、中国、チベットをも包含する世界帝国の構想であった。都市アレクサンドリアはエジプト、イラン、アフガニスタン、トルキスタン、パキスタン、バクトリア、ゾグディアナ等々30ヶ所に設置され、どの都市も直角に交錯する直線道路からなる市街地と、丘の上には必ず神殿を設け、その下にはアゴラ、劇場、体育館、浴場、その他の公共建造物が建てられていた。各アレクサンドリアにはギリシヤ人の将兵と官吏が残されて、彼等はギリシヤ語を語り、ギリシヤ文字を使い、ギリシヤの美術工芸とギリシヤの貨幣を使用した。アレクサンドリアのギリシヤ人の活躍と生活全般は、ギリシヤ文化をよく普及し、ギリシヤの言葉とその生活を広く伝えた。ギリシヤ人は現地の人々ともよく交わり、そ

の固有の文化と交流したのである。かくしてオリエントの各地には、アレクサンダー以後、後世のローマがこれを支配するB.C.30年に至るまでの、300年に及ぶヘレニズム時代が出現する。筆者は1970年インドを経てパキスタン政府を訪門した際、アユブカーン大統領の失脚する直前のことで戒厳令下にあつてその目的とするアジア各地へユネスコを普及するためのユネスコ使節としての任務は不十分に終ったが、パキスタン政府の科学文化省と日本大使館の計らいで、日本人のかつて見たことの無いというTaxilaの巨大な遺跡と博物館を余すところなく案内してもらった。ユネスコの交渉を不能に帰せしめた自国の政変に対する責任の償いの意味である。インダス河の上流、現在パキスタン首都イスラマバードの東南にあたり、B.C.5世紀—A.D.5世紀にわたり1000年間栄えた古代大都市である。とくに学問芸術の極めて高度に発達したところ、アレクサンダーはB.C.326年カイバル峠を超えてこの地へ到りギリシヤ遠征軍として迎えられている。かつてインドのマウリヤ王朝時代にはアショーカ王の統治下にあり、王の墳墓もそこにあった。この地は三期に分れバクトリア人・ギリシヤ人・サカ族・パルティア族・クシヤン族と相次いで侵入したが、皆文化大都市へと力を注いだ。A.D.5世紀にエフタル族の侵略による烈しい野蛮な破壊行為の災害を受けて著名なオアシス国家Taxilaは僅か二日間で壊滅した。今は僅かにところどころ発掘され全くの廃虚のままであるが、至る所に散在する仏跡、残された仏像群等に混じってギリシヤの彫刻を数々見学したし、第二都市シルカップの遺跡は明らかに都市の構造、生活器具もギリシヤ風であることを知って帰った。ただ何等の予備知識も無く、まことに不用意に粗雑な観察で帰国して悔まれるが、これらの事実はA.D.7世紀に書かれた玄奘の「大唐西域記」に精しく記されるところ、漸く最近発掘が開始されたばかりの驚くべき北アジアの遺跡である。アジアにまで及んだアレクサンダー東征の意義の文化的に極めて大きかった史実を、今日ギリシヤを記述するにあたって再び

筆者の胸にひしひしと蘇ってきたことを一層深い感動を以てここに記したい。中国の東晋時代の僧法顕は、クシャン族による仏教文化の最高に栄えたところにここを訪れたのであり、それはA.D. 5世紀である。玄奘が天山南路を経てナールンダ僧院へと赴く途次のA.D. 7世紀には、全く荒廃した荒野に化していたと語られる。当時、筆者は知識乏しくしてそれ程貴重な現地の案内をうけつつも、案内人の説明も何も無くして唯余りにも不思議なTaxilaの遺跡に想像を逞しくして帰ったが、今日ギリシヤを調べることによって、意外にも仏教文化と、アジアにおけるインド、中国およびギリシヤとの関係が非常に明らかとなったことは望外の驚きである。東西文化交流の姿をはっきりと残す古代の歴史を研究することの重要性を今さらのごとくことさらに強く感ずるのである。

〔 参 考 文 献 〕

- TA EΛΛHNIKA MOTΣEIA Athens, 1975.
 Bradford, E., The Companion Guide to the Greek Island, London, 1975.
 Wood House, C.M., The Story of Modern Greece, London, 1968.
 ACROPOLIS, a Picture Album and a Guide-Book by Yori and Demetra Voulgaris.
 National Museum EKDOTIKE ATHENON s.a.
 アレクサンダーの戦争 長沢和俊編 講談社 1985年。

付記 本論の題名ヨーロッパ文化文明像の英訳については

The Figure, My Perception, Images,
 The Form,

Portrait

The Portrait などが考えられたが、神学のDr. CLARK・B・OFFNER 先生、英文学の山田修治先生、に懇篤なご意見ご指摘をうけた。第Ⅱ篇ギリシヤ・エーゲ海篇は A Portrait として発表する。日本語では一様に「像」の語で表現できても、英文ではその内容によって夫々のニュアンスの異ってくることを感ずる。内容に従ってもう少し思想的・哲学的要素の含まれる場合は、Perception と変えざるを得ないかも知れぬ。各篇ごとに英訳の文章の表現は変化する可能性さえ覚える。世界の各地へ赴いて文化・文明を求めた目的は、ユネスコの目的である東西文化交流の歴史の実態を把握するために、相当幅広い範囲に、学的領域も、地理的空間も探求しつつけた。「文化」に社会現象の加わった概念を「文明」と考えて考察を進めている。筆者は法学を専攻したもので、歴史の専門家ではない。しかもこの種の仕事にとりくんでしまった不用意と未熟さから、時々誤りを侵すかも知れない。専門の方々がお気づきになる点があったら何卒御教示賜りたいと思う。事実、第一篇のローマ以来、本論考の全篇にわたって、その史実に誤記がないか、長男学の厳しい監督を受けてしまった。ヨーロッパ文化・文明像はまだ序の口でなお数篇を続けるつもりであるが、これは終始完全に愚息の監修のもとにあるであろうことを白状しておく。

1986. 7. 1

〔 写 真 説 明 〕

- (1) プロプユライア城門 ムネシクレス作 ペロポネソス戦争中に建築し粗岩のままのオリジナルな姿で残された。B.C. 430年頃。
- (2) パルテノン神殿 イクティノス作 B.C. 432年完成 東北角より撮影、東西を貫ねる北面の床石はかすかに円弧を描き、柱と柱との間隔は夫々異なる。
- (3) アクロポリスの神殿下にあるヘロデス・アッチカの音楽堂、ヘロドス、アティカスの作 A.D. 161年完成
- (4) アクロポリスの神殿下にあるオデオン音楽堂、座席の構造32列5000人を収容した。イロドス、アティ

カス作成 A.D. 160年頃完成。

- (5) 国立考古学博物館（6-13は博物館の蔵品、6以下の説明は5国立考古学博物館の節に書いたように、各展示品には英文で詳しい説明文が付記されていたのをそのまま写してきたものである。
- (6) ミケネ時代の代表的模様や図形の風格をもつギリシヤの壺、ミケナイのアクロポリスの墓環の中から発見 B.C. 1200年頃
- (7) エーゲ海文明を象徴する章魚の絵の描かれた壺。
- (8) クレタ島から出土したミケナイの名高い水瓶、描かれているミケナイの代表的模様とされている図は、槍兵を方形に配置した陣の形で（Phalax）方陣と呼んだ陣形で今、戦場に向う姿を描いた。なおその背後に片手を挙げてfarewell（告別）のジェスチャーを示している女性の姿が描かれていると説明してあった（壺の下に書かれていた原文のまま訳す。壺の左端に立っているのがその女性であるが写真では不鮮明）
- (9) 名高い騎馬像、恐らくアレクサンダーと愛馬ブーケファラスの姿であろう。1875年メロス Melos で発見された後期ヘレニズム時代（B.C.125~100）の作
- (10) B.C. 140 年頃のヘレニズム時代の海神ポセイドン、A.D. 1877年メロス島にて発見
- (11) 左手を顔の側に挙げ頭部は右へまわしているペプロフォロス Peplophors B.C. 5世紀の作
- (12) 牧神パンに向って、肩ごしに片手にサンダルを振り上げて威嚇している女神アフロディテ（ヴィーナス）デロス島にて B.C.100年頃発見
- (13) 海の女神アフロディテ（ヴィーナス）ペロポネソスのティレア Thyrea の古代 Villa（別荘？）の中から発見された女神でレウコテア Leukothea 又はアムイモン Amymone と呼ばれている（原文英語訳のまま）

1

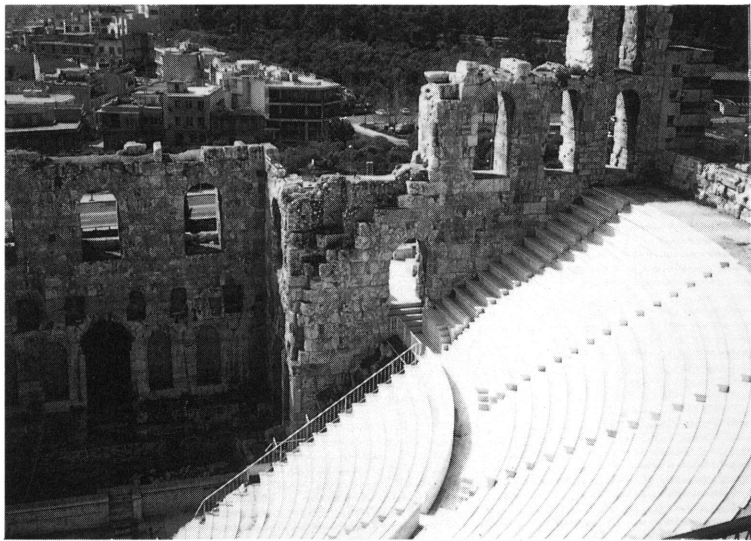


2

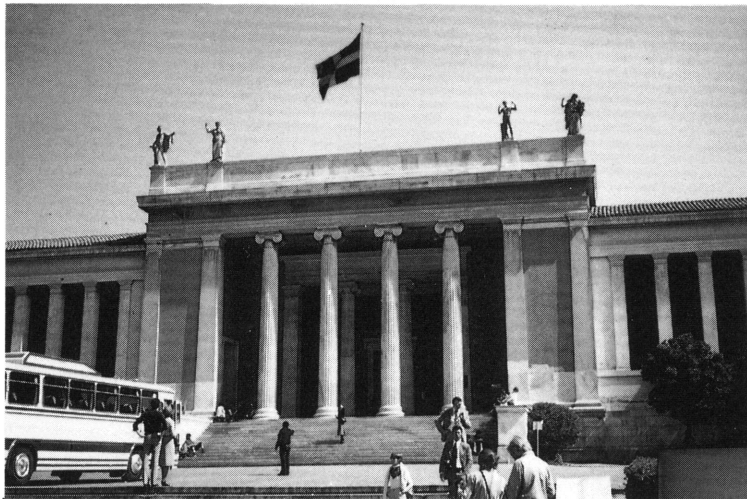


3

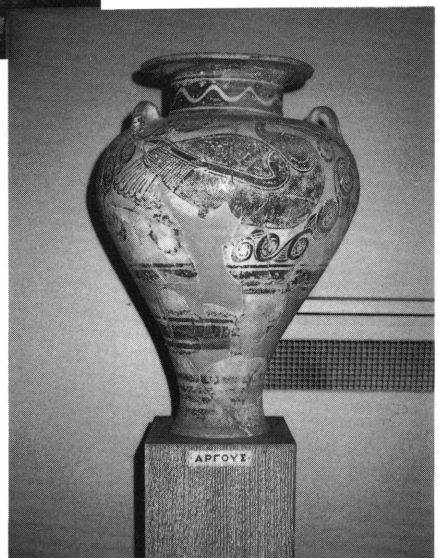




4



5

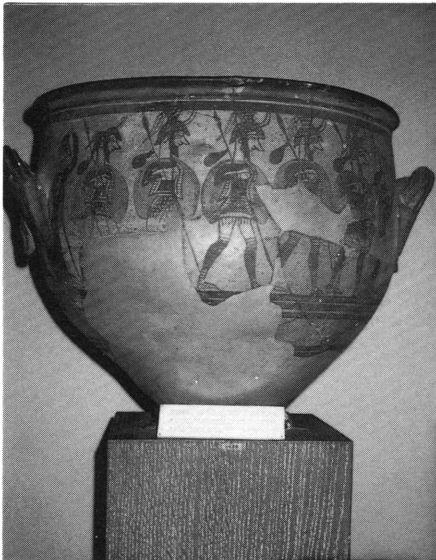


6

7



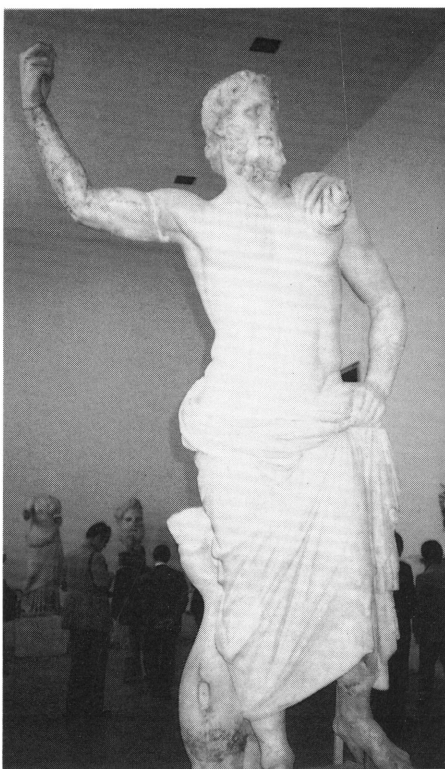
8



9



10



12



11



13

